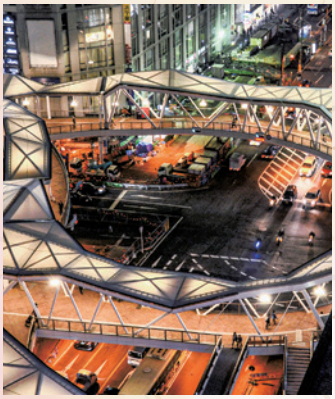
山口 健太 管理部長
（一級建築士事務所 設計部）

山口 篤樹 代表取締役

多様なニーズに〝膜〟で応える

昭和47（1972）年に山口篤志郎氏が多久町で創業し、テント倉庫やスタジアムの屋根、駅前の通路シェルターなど、テント材である〝膜〟を使った製品が好評の山口産業。業界でも珍しく、セールスから設計、膜と鉄骨の加工、施工まで一貫して自社で手掛け、東京や大阪など8か所の営業所を拠点に、全国へ優れた製品を届けています。

「膜で街を未来を華やかに」という方針のもと、同社は平成28（2016）年にMembrane（膜）とBrilliant（輝かしい）を合わせた造語「Membry」を自社製品の総合ブランドネームに命名。「ブランド力を向上することで、私たちの身近な暮らしを支える膜構造建築業界全体を盛り上げようと思い名付けました。山口産業に『できない』という言葉はありません。お客さまのニーズをつかみ、応えられるようなものづくりを続けていきます」と山口管理部長は、自社の強みを生かしながら、世の中に役立つ製品作りに尽力しています。



▲阿倍野歩道橋（大阪府）

▲バルーントイレ（佐賀市）

地域のために技術を生かす

コロナ禍で厳しい状況の医療現場の役に立てないかと、3月末に誰でも簡単に組み立てられる医療用テント「メンブリーシェルター a-i-r」を企画し、わずか1か月でリリース。さらにその翌月には、深刻なマスク不足の状況を改善しようと、テントの素材とこれまでに培った縫製技術を生かして「テントマスク」を発売しました。

急ピッチでの開発が実現したのは、同社が持つ豊富なノウハウと地域に貢献したいという熱い思いがあったからこそ。平成29（2017）年には経済産業省が選定する「地域未来牽引企業」に選ばれ、特に本社を置く多久市への貢献に力を入れています。

「毎年多久まつりの会場を設営したり、地元出身者を積極的に採用したりと、さまざまな角度から多久市との縁を深め、地域活性化につなげられるよう取り組んでいます。市民のみなさんからも『こんなものが欲しい』と、ご要望をお寄せいただけたら嬉しいです」と笑顔の山口代表取締役。

山口産業はこれからも、〝膜〟の限りない可能性を追究し続けます。

マスク不足を打破する▶「テントマスク」

医療用テント「メンブリーシェルター air」

社員インタビュー

入社9年目

川島 聡味さん（南多久町）
製造部縫製課

服飾関係の仕事を経験し、縫製の技術が生かせる山口産業に入社しました。先輩にテントのことを一から教わり、楽しくミシンに向かっています。
社員みんなが元気で素直な明るい職場です。

入社4年目

原田 奏司さん（南多久町）
一級建築士事務所　設計部

地元で設計の仕事をしたいという強い思いから入社しました。難しい案件でもまず挑戦させてくれるので、日々やりがいを感じています。
最近、家族や友人から会社の評判をよく聞くので嬉しいです。

問い合わせ

山口産業株式会社
☎74-2525（本社）
ホームページ▼